

阿蘇の草原は季節ごとに表情を変えて私たちの目を驚かせてくれる。早春の野焼きで黒焦げになったかと思つと、夏には青々とした草原が牧歌的な風景をつくりだす。ちよつと前まで黄金色に輝いていたススキ野原が、先日来の雪で純白に染まった。この地で生まれ育つた夫のおじは、南阿蘇を「何も無い田舎」と言つたが、目を見張るほど美しいこの景観は、子供や孫に残していきたい大切な宝物だ。

ところが阿蘇に来て間もなく、草原が減りつつあることを知って驚いた。昔は野草といえは家畜のエサやたい肥の原料、さらには屋根材としても欠かせない資源だったという。しかし屋根は瓦に変わり、粗飼料は安く輸入されるようになった。野草の利用が減っているため、阿蘇の草原は年々少なくなっているそうだ。

「もっと野草の利用が増えればいいんだ」。単純な私はそう考

南阿蘇

吉田 愛梨

里の風

草の家

た。イギリスやオランダでは重油や灯油の代わりにボイラーの燃料となっているし、カナダでは草が壁材として使われている「草の家」もある。といつても骨組みは木や鉄骨で、レンガの代わりに草のプ

ロックを積んで壁にする。頑丈な上に断熱効果が高く、また自然素材なのでシックハウスの心配もない。表面には土を塗るので、耐火性もあるというではないか。壁に使うならまとまった量が必要だ

し、地元の資源で家がでるなんて考えただけでワクワクする。阿蘇から草原がなくなつたら、大切な観光資源を失うばかりでなく、草原特有の動植物もすみかをなくしてしまつ。十年ほど前から続いている野焼きボランティアは草原を守るために大きく貢献しているが、地元住民としても何か策を考えていきたいと思つた。

野草の新しい利用法を探るため、南阿蘇村の協力も得てワークショップ形式での「草の家」(ストローベイルハウス)づくりが始まったのは今年の十月。野草プロジェクトの重さは十^キ弱。高くなるにつれてけっこう腕力がある作業だが、自分たちで家をつくっていくのは面白いらしく、参加者たちからは「いつか自分でも建ててみたい」という声が多く聞かれた。できあがるのは来春の予定。「草の家」がいくつもできれば、阿蘇の草原保全につながるだけでなく、新しい産業が生まれるかもしれない!

(おあしす米生産者、NPO九州バイオフォーラム理事長)



野焼^キ

絵・有働 孝昭